

堺屋太一

俯うつむき加減の

男の肖像

上



新潮社

俯うつむき加減の
男の肖像

堺屋太一
上

新潮社

うつむ かげん おとこ しょうぜう
俯き加減の男の肖像（上）

1995年7月25日発行

【著 者】 さかい や たいち
堺屋太一

【発行者】 佐藤亮一

【発行所】 株式会社新潮社

郵便番号162 東京都新宿区矢来町71 振替00140-5-808

【電話】 編集部(03) 3266-5411 読者係(03) 3266-5111

【印 刷】 二光印刷株式会社

【製 本】 加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

© Taichi Sakaiya 1995. Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-406301-0 C0093

目次

第一章 わが身の影

5

第二章 終りと始まり

89

第三章 激流の中で

219

淀屋家系図

309

大和川流域図

310

装帧◆西のぼる

俯き加減の男の肖像
(上)

第一章

わが身の影

「妙なお人や……」

と、大黒屋策兵衛は思う。すぐ目の前の浜屋円蔵という男が、である。

高く伸びた背、尖った肩、しっかりとした腰、真すぐ前を見て夏草の茂る坂道を登る後姿は、お武家のものだ。だが、決してそれを語ることはない。この一カ月あまりの間、共に歩く日、共に寝る夜も多かったが、この男の口から身の素生も以前の職も聞いたことがない。侍勤めとは縁もゆかりもない連中でさえ、武門の出を気取りたがるこの時代に、何とも不思議なことだ。

そればかりか、この男が何を望み、何を企てているのかも、さっぱり分らない。河内木綿の周旋を生業として、広く諸国を歩き、多く人に会って来た大黒屋策兵衛にも、浜屋円蔵は読めない男だ。この男を紹介した河内今米村の庄屋中川甚兵衛の口上では、

「只今進めている大和川付替え普請の事などをお調べ頂く御仁」

ということだったが、それにしても歩く場所も聞く話も広過ぎる。いま行く道は、大和川の流域をはるかに南へそれた千早坂だ。昨日、柏原から富田林に向うといった時には、大和川に注ぐ石川の流域を見るのかとも思ったが、今朝になって千早坂を通過して大和に入ろうといひ出した。大和川の事なら、それが流れている国分の道を抜けるのが普通だ。それが河内と大和を繋ぐ本道であり、道程も近いし坂も緩い。

「妙なことをするお人や……」

考えれば考えるほど、策兵衛はそう思わざるを得ない。

「大黒屋はん。ここは大分ときつはんなあ」

突然、前を行く円蔵が振り返って声をかけた。策兵衛は、先手を打たれたような気がして首がすくんだ。

「ほらなあ……、名にし負う楠の城があつたところだっさかいになあ……」

策兵衛がそんな昔話を出したのは、相手が武家の出であることを確かめたい気があつたからだ。

「ほう、楠正成はんの城はこの方であつた……」

路傍の石に腰を降ろしながら、円蔵は左の葛城山、右の金剛山を見やり、

「楠正成であつて知ってるか……」

と、丁稚の悟助に問いかけた。浜屋円蔵は、策兵衛の連れ歩く十五歳の少年が入っているらしく、何かと話しかけ語り聞かす。

「ううん、よう知りまへんけど……」

悟助は激しく首を振り、黒く汚れた袖口で額の汗を拭いた。大きな瞳がじっと動かないのは、円蔵の話を期待しているしるしだ。

宝永元年（一七〇四年）夏六月。十六年間続いた元禄が宝永と改元されたばかりの頃だ。四年前に死んだ水戸黄門光圀のはじめた「大日本史」の編纂はまだ完成しておらず、「南朝正統論」などというものも世に知れ渡っていない。それだけに、楠正成の名は地元でも商人の丁稚にまで知られるほどではない。その上、百年の泰平を経たこの時代には、戦さの話も衆人には縁遠い。江戸の将軍・綱吉は、犬馬は勿論魚鳥昆虫にまで憐みを施すほどの平和主義者だ。

「楠正成というたらな、この山の上に城を築いて足利の大軍を散々に手こずらした偉い殿様や。兵法上手、奇策縦横のお人やったそうな」

浜屋円蔵は短く説明した。

「それでその楠のお家はえろ栄えましたんか」

悟助の子供らしく無遠慮な質問に、円蔵はちよつと困った。

「ふーん、結局は亡んだんやな……」

「偉い殿様やったのに亡んだんでつか」

悟助は腑に落ちぬように小首をかしげた。

「そうや……時の流れというもんや……」

円蔵は淋しげに呟き地面に視線を落した。それが策兵衛にかねての疑問を訊ねる気を起させた。

「浜屋はん、あんさんも変わったお人だんな。大和へ行くのにわざわざこないな所を通るとは……。わてらでも、こんな道通ること滅多にあれしまへんで……」

「ははは……、いろんな道を通ってみるのもええやおまへんか」

円蔵は、気をそらすように声高に笑ったが、策兵衛はなお追求した。

「とおっしゃると、これまでもいろんな道を歩んで来やはったわけで……」

「ああ……、まあな……」

円蔵は曖昧に答えて視線をそらしたが、その目付きは冷たく鋭かった。なだらかに広がる金剛葛城の裾野を数えるように見ている。そこには水をたたえた水田に混じって、一尺あまりに伸びた綿の木が並ぶ畑も多い。戦国時代の末期からはじまった河内の綿作は徐々に南に拡がり、近頃はこの辺でも盛んだ。円蔵の目は、その綿畑の一つ一つを追っている。

「やっぱりこのお人は、綿でなんかやろうとしてるんや……」

策兵衛は確信した。それなら黙って見逃す手はない。うまい話なら乗りたいし、迷惑な事なら妨げねばならぬ。たとえ、四十年來の懸案、大和川の付替え普請を実現させた実力庄屋・中川甚

兵衛に紹介された人物であっても、こと商売となれば遠慮することもない。大黒屋策兵衛が、浜屋円蔵にせねばならぬ義理は、諸方案内料として受け取った銀三百匁限りだ。

「浜屋はん。何ぞ綿のことで知りたいことがあったら、この大黒屋策兵衛に聞いとくなはれや」
策兵衛はまずそう切り出した。

「こう見えてもあては河内で生れ、十二の時から綿買い木綿集めに走り回って二十年。綿のことなら知らんことおまへんよってなあ……」

「ほお、ならば大黒屋はんは三十二。わしよか一つ年下だったか……」

円蔵は咄嗟にそんな受け答えをした。確かに円蔵は年より若く見え、策兵衛は老けている。歳は話をはぐらかすのに適当な話題だ。だが、ちよつと間を置いて円蔵は、

「大黒屋はん、よろしゅう頼みますわ。いずれあんさんのためにもならしてもらいますよってなあ……」

と真顔で頭を下げた。共同事業者と認め、将来の提携関係を約束する意味の発言だ。だが、それ以上のことは、この時も円蔵はいわなかった。

金剛山と葛城山の間の峠、そこは「水越峠」と呼ばれている。元和の初年（一六一五年頃）に、この峠の大和側、吐田郷に住んだ浪人・上田角之進が葛城山の西斜面に流れ落ちる水を東の大和へ引くことに成功、分水嶺の反対側に峠を越して水の流れる珍しい形になっているからだ。

もつとも、この峠越えの水流はもつと古くからあつたらしく、角之進の時代より七十年前も前の天文年間に、導水路を破壊した河内の百姓三人が磔刑になったという記録もある。そしてそれは、つい三年前の元禄十四年にも再燃、双方人数を出して相争った揚句、京都所司代で一年がかりの

大訴訟が演じられた。結果は元通り大和側の勝訴となったが、河内の百姓たちにはこの不自然な水流がしゃくの種だったらしく、明治になってからも同様の事件が起っている。海拔五一七メートル、河内と大和の間の峠では最も高く最も峻しい。

円蔵と策兵衛、悟助の三人は、旧暦六月のきつい陽に焼かれながら、この峠を登った。人と牛馬が歩くだけの細い上り坂が長々と続く。処々、道は夏草に隠され、不意に段差が現われる。車が往来するほどの所ではないのだ。

肩からはみ出すほどの荷を背負わされた悟助は、遅れがちながらもよく付いて来た。時々、円蔵が手を差し伸べる事があっても、悟助はそれにすがろうとはしない。この少年は、華奢な体格ながらなかなかの頑張り屋らしく見えた。

「こいつの里は若江の端でよう水浸きまんねや……」

大黒屋策兵衛が、汗と塵にまみれた悟助の顔を見ながら、そんなことをいった。若江といえは生駒信貴の山と大坂城のある上町台地の間に大和川が作った中洲地帯だから、河川の氾濫による浸水が多く、百姓は貧しく喰いかねる。悟助が商人として身を立てようと懸命なのもうなずける。策兵衛の言葉はそんな意味を含んでいた。

「その水浸きも、今度の大和川付替え普請でのうなるはずだが……」
円蔵は怪訝そうに呟いた。

「そんなこと百姓は信じてしまへんで……」

策兵衛はそれを繰り返した。前に若江を歩いた時にもこの議論は交したことがある。この国の百姓は、悪い噂は信じ易いが、よくなる話は容易に信じない。そのことが円蔵には不愉快らしく、「そのこと、悟助どんからも伺うた」

と無愛想に答えた。こうした時には、つい侍言葉が出る。それがまた、策兵衛には気になった。

「この男は一体何者で、何をしようとしているのか」

という疑念が頭をもたげて来る。

「もしかしたら御公儀の隠密では……」

とも考えた。大和川の付替えを大坂城代に承知させたほどの中川甚兵衛ならば、そんな世話を頼まれたとしても不思議ではない。

「どこぞの大名の回し者か……」

とも思つて見た。水田以上に収益が良く、さほど水を要しない綿作りに関心を持つ大名は多い。綿作の栄える河内・大和の技術を習得するために間者を送り込むこともあるだろう。

「あるいは、ただ追手を避けるためにこんな旅を続けているだけかも……」

とも疑つてみた。大和川の付替えでは二百七十三町歩もの田畑が新しい川筋になつて潰れる。それを強行するに当つては、相当に強引な手も使われたと聞く。身を隠さねばならぬ浪人者が一人二人出たとしてもおかしくはあるまい。何といつても二カ月ほどの旅案内に銀三百匁も支払うというのは只事ではない。金にして約六両、足軽なら一人一年の給金だ。

大黒屋策兵衛は、あれこれ考えるうちに、足以上に頭が疲れた。大きな儲け仕事なら乗りたいが、危いことなら早く逃げたい。ただ一人の供、丁稚の悟助もだんだん丸め込まれているような気がする。

「悟助どん、峠の頂上や。あとは下り坂やでえ……」

先を行っていた円蔵が、不意にそう叫んだ。楽しげな、夢を持つ者の笑顔だった。

峠の東側、大和の方は傾斜が急だ。道は何度か折れ曲つて深い谷に降り、細流に沿つてうねう

ねと下る。やがて小一里ほども行くと両側の山が切れ、段々畑の広がる土地に出る。視界が開け、大和盆地が一望できる。ほっと一息つきたくなるような眺めだ。そしてその盆地にも、綿畑が多い。宝永の頃の大和は、河内、和泉、三河などと並ぶ綿の大産地だった。

峠を下った道は、ほどなく街道に出会う。京と紀伊を結ぶ高野街道だ。車の高速運行を考えることのなかったこの時代の街道は、さほど起伏を気にしない。この高野街道も、凸凹の多い山麓を這うように伸びている。

街道に沿って一村があり、室町幕府の代官所だったという屋敷がある。それは、現在も国宝として保存されているが、円蔵らの歩いた宝永の世でも、既に三百年近い歳月を経た黒ずんだ姿が人目を引いたはずだ。しかし、それ以上に円蔵を驚かせたのは、この山際の場所には不似合いな大きな家がいくつか建っていることだ。

「ここは名柄いいましてな、この辺一帯の綿の集まる処でんね。そやから、近頃は太坂あたりの大店の分家や出店がでてますんや」

策兵衛は、その理由をこう説明した。なるほどそういうえば、農村には珍しく、目立つほどの建物はみな、床の低い商家造りになっている。

「はお……、やっぱりこれも綿のお陰でっか……」

円蔵は、我が意を得たように頬を歪めたが、やや間を置いて、

「大黒屋はん……。河内の綿と大和の綿はどっちがよろしおます……」
と訊ねた。

「そら、河内だ」

策兵衛は即座に答えた。

「綿作が広まったのは大和の方が早いらしおすけど、今では河内の方がずっと上だす。大和の綿

は堅い上に毛が太うて糸取りには向きまへん。そこへ行くと河内綿は摂津もんよかちと赤いけど、糸取りは最高だす。柔こうて毛が長うて……。綿には砂地が向いてまんねや。ここらへんはともかく、大和の国中は泥土やから仕方がおまへん」

策兵衛は、大和盆地の方を指差して説明した。大和では盆地の中央部を「国中」と呼ぶ。

これは策兵衛のお国自慢などではなく、元禄・宝永頃からの定説である。のちの天保四年（一八三三年）に大成した大蔵永常の「棉圃要務」にもそのように明記されている。

「さよか……。先に作り出した大和が追い抜かれてますか……」

円蔵はゆつくりと呟いた。そしてもう一度、しんみりとした口調で、
「先にはじめた所がやがて追い抜かれる。綿も、塩と同じやなあ……」
と繰り返した。

「塩もやて、妙な……」

そういいかけて策兵衛はハツとして口をつぐんだ。これまで思いもつかなかった浜屋円蔵の前身が見えたのだ。

「円蔵はん。もしや、お塩に関わりあったお武家さんやったんと……」

策兵衛は、立ち止って用心深く訊ねた。

「ははは……。そう遠回しにいわんかて……」

円蔵はわざとらしく高笑いした。

「いかにも、赤穂の浅野家におりました。仇討ちに加わらなんだ、世にいう不義士の一人ですわ……」

「そらそら……」

策兵衛は、円蔵の落ち着いた態度に安堵しながらも、次の言葉に窮した。

赤穂浅野家の浪士四十六人が「主君の仇」と見られた吉良上野介の屋敷に討ち入り、その首を取って本懐成就したのは元禄十五年十二月十四日、そしてその人々が切腹したのは翌十六年二月四日。今から一年四カ月前のことだ。事件から処刑まで八十日、幕府は迷いに迷った揚句、討入りの行為を罪としながらも、切腹には目付を派遣するという陪臣には異例の処置をとり、その忠心を賞讃する形を作った。

以来、天下に赤穂義士の美名が轟く反面、これに加わらなかった浅野の旧臣は「不義士」「不忠者」の汚名を着せられ、仕官は勿論浪宅さえも借り難い有様だ。今、目の前にいる浜屋円蔵がその一人とあれば、自らの身分前歴について奇妙なまでに沈黙して来たのも納得できる。だが、それを知って、何といえばよいのか、大黒屋策兵衛にも分らない。「不忠不義」といわれる武士の心中が、河内の綿貫いには察しかねた。

「こっちの檀那はんは、石野七郎次いう名で赤穂様の塩を取り仕切った偉いお武家やったんでっせえ」

突然、丁稚の悟助が大声を発した。

「へえ、そんなお偉い御身分なら、別に……」

策兵衛がそういいかけたのを抑えるように円蔵が、

「別に隠していたわけやない。疾うに丁稚どんからお聞き及びやと思つてりました」
と、おかしように頬を崩した。

だが、夕陽に照らされたその笑顔は、暗く沈んで見えた……。